

仙人

芥川 龍之介

藍岩堂



仙人



藍岩堂



皆さん。

私わたしは今大阪ほうちうにいます、ですから大阪ほうちうの話をしましょう。

昔、大阪ほうちうの町へ奉公めしたきほうこうに来た男がありました。名は何と云ったかわかりません。ただ飯炊奉公めしたきほうこうに来た男ですから、権助ごんすけとだけ伝わっています。

権助ごんすけは口入れ屋くちいの暖簾やのれんをくぐると、煙管きせるを啣くわえていた番頭ばんとうに、こう口の世話を頼みました。

「番頭ばんとうさん。私は仙人せんじんになりたいのだから、そう云う所へ住みこませて下さい。」

番頭ばんとうは呆気あつけにとられたように、しばらくは口も利かずにいました。

「番頭ばんとうさん。聞えませんか？ 私は仙人せんじんになりたいのだから、そう云う所へ住みこませて下さい。」

「まことに御気の毒様ですが、――」

番頭ばんとうはやっといつもの通り、煙草たばこをすばすば吸い始めました。

「手前の店おひではまだ一度も、仙人せんじんなぞの口入れは引き受けた事はありませんから、どうかほかへ御出おいでなすって下さい。」

すると権助ごんすけは不服ふふくそうに、千草ちくさの股引ももひきの膝ひざをすすめながら、こんな理窟りくつを云い出しました。

「それはちと話が違ちがうでしょう。御前ごぜんさんの店の暖簾やのれんには、何と書いてあると御思ごしいなさる？

万口入よろずくちいれ所ところと書いてあるじゃありませんか？ 万よろずと云うからは何事なんじでも、口入れくちいをするのがほんとうです。それともお前まへさんの店では暖簾やのれんの上に、嘘うそを書いて置いたつもりなのですか？」

なるほどこう云われて見ると、権助ごんすけが怒るのももつともです。

「いえ、暖簾やのれんに嘘うそがある次第しだいではありません。何でも仙人せんじんになれるような奉公ほうこう口を探せとおっしゃるのなら、明日あしたまた御出ごいで下さい。今日けふ中に心当こころあたりを尋ねて置いて見ますから。」

番頭ばんとうはとにかく一時逃にげれに、権助ごんすけの頼たのみを引き受けてやりました。が、どこへ奉公ほうこうさせたら、仙人せんじんになる修業しゅうぎょうが出来るか、もとよりそんな事ことなぞはわかるはずがありません。ですから一まず権助ごんすけを返かえすと、早速さつそく番頭ばんとうは近所きんじよにある医者いしやの所へ出かけて行きました。そうして権助ごんすけの事を話してから、

「いかがでしょう？ 先生せんせい。仙人せんじんになる修業しゅうぎょうをするには、どこへ奉公ほうこうするのが近路ちかみちでしょう？」と、心配しんぱいそうに尋ねました。

これには医者いしやも困こまったのでしょう。しばらくはぼんやり腕組うでぐみみをしながら、庭にわの松まつばかり眺ながめていました。が番頭ばんとうの話を聞くと、直ただぐに横よこから口を出したのは、古狐ふるぎつねと云う渾名あだなのある、狡猾こうかつな医者いしやの女房にようばうです。

「それはうちへおよこしよ。うちにいれば二三年うち中には、きっと仙人せんじんにして見せるから。」

「左様さようですか？ それは善よい事を伺うかがいました。では何分なんぶん願ねがいます。どうも仙人せんじんと御医者ごいしや様とは、どこか縁ゆかりが近いような心もちが致いたして居りましたよ。」

何も知らない番頭ばんとうは、しきりに御時宜おじぎを重おもねながら、大喜おどろびで帰かえりました。

医者いしやは苦くるい顔かほをしたまま、その後のちを見送みおくっていましたが、やがて女房にようばうに向むかいながら、

「お前は何と云う莫迦ばかな事を云うのだ？ もしその田舎者いなかものが何年いっこういても、一向いっこう仙術せんじゆつを教おしえてくれぬなぞと、不平ふへいでも云い出したら、どうする気きだ？」と忌々いまいましそうに小言こごとを云いました。

しかし女房にようばうはあやまる所ところか、鼻はなの先さきでふふんと笑いながら、

「まあ、あなたは黙もくっていらっしゃい。あなたのように莫迦ばか正直ちかみちでは、このせち辛い世せの中に、御飯ごはんを食くべる事ことも出来できはしません。」と、あべこべに医者いしやをやりこめるのです。

さて明るあかるくなる日ひになると約束やくそく通り、田舎者いなかものの権助ごんすけは番頭ばんとうと一ひとしよにやっ来て来ました。今日はさす

がにこんりり権助も、初はつの御目見えだと思ったせい、紋附もんづかの羽織を着ていますが、見た所はただの百姓と少しも違ちがった容ようす子はあります。それが返かえって案外あんがいだったのでしょ。医者はまるで天竺てんじくから来た麝香じゃこうじゅう獣じゅうでも見る時のように、じろじろその顔を眺めながら、

「お前は仙人ふしんになりたいのだそうだが、一体どう云う所から、そんな望みを起したのだ？」と、不審ふしんそうに尋ねました。すると権助が答えるには、

「別にこれと云う訣わけもございませんが、ただあの大阪の御城を見たら、太閤様たいこうさまのように偉い人でも、いつか一度は死んでしまう。して見れば人間と云うものは、いくら栄耀えいよう栄華えいがをしても、果はかないものだと思ったのです。」

「では仙人になれさえすれば、どんな仕事でもするだろうね？」

狡猾こうかつな医者いしやの女房にようぼうは、隙すかさず口を入れました。

「はい。仙人になれさえすれば、どんな仕事でもいたします。」

「それでは今日から私わたしの所に、二十年の間奉公おし。そうすればきっと二十年目に、仙人になる術を教おしえてやるから。」

「左様さようでございますか？ それは何ありがとより難有いちもんうございます。」

「その代り向う二十年の間は、一文も御給金ごきんはやらないからね。」

「はい。はい。承知しょうちいたしました。」

それから権助は二十年間、その医者いしやの家に使つかわれていました。水みづを汲まきむ。薪たを割わる。飯いを炊たく。拭ぬき掃除そうじをする。おまけに医者いしやが外へ出る時は、薬箱くすりばこを背負ともって伴ともをする。一一その上給金じょうほうは一文でも、くれと云った事がないのですから、このくらい重宝じゅうほうな奉公人にほんは、日本中探してもありますまい。

が、とうとう二十年たつと、権助はまた来た時のように、紋附の羽織をひっかけながら、主人夫婦の前へ出でました。そうして慇懃いんぎんに二十年間、世話せわになった礼を述べました。

「ついては兼ね兼ね御約束ごやくそくの通り、今日は一つ私にも、不老不死になる仙人の術を教おしえて貰もらいたいと思おもいますが。」

権助にこう云いわれると、閉口あしたのは主人の医者です。何しろ一文も給金をやらずに、二十年間も使つかった後あとですから、いまさら仙術は知らぬなぞとは、云いえた義理ぎりではありません。医者はそこで仕方なしに、

「仙人になる術を知しっているのは、おれの女房にようぼうの方だから、女房に教おしえて貰もらうが好いい。」と、素そっ気なく横よこを向むいてしまいました。

しかし女房は平気なものです。

「では仙術を教おしえてやるから、その代りどんなむずかしい事でも、私の云いう通りにするのだよ。さもないと仙人になれないばかりか、また向う二十年の間、御給金なしに奉公しないと、すぐばちに罰ばちが当あって死しんでしまうからね。」

「はい。どんなむずかしい事でも、きつと仕し遂とげて御覧ごらんに入いれます。」

権助ごんすけはほくほく喜よろこびながら、女房の云いいつけを待まちっていました。

「それではあの庭の松に御登ごとうりり。」

女房はこう云いいつけました。もとより仙人になる術なぞは、知っているはずがありませんから、何でも権助に出来できそうもない、むずかしい事を云いいつけて、もしそれが出来できない時には、また向う二十年の間、ただで使つかおうと思おもったのでしょ。しかし権助はその言葉を聞くとすぐに庭の松へ登のぼりました。

「もっと高く。もっとずっと高く御登り。」

女房は縁先に佇みながら、松の上の権助を見上げました。権助の着た紋附の羽織は、もうその大きな庭の松でも、一番高い梢こずえにひらめいています。

「今度は右の手を御放し。」

権助は左手にしっかりと、松の太枝をおさえながら、そろそろ右の手を放しました。

「それから左の手も放しておしまい。」

「おい。おい。左の手を放そうものなら、あの田舎者は落ちてしまうぜ。落ちれば下には石があるし、とても命はありゃしない。」

医者もとうとう縁先へ、心配そうな顔を出しました。

「あなたの出る幕ではありませんよ。まあ、私に任せて御置きなさい。――さあ、左の手を放すのだよ。」

権助はその言葉が終らない内に、思い切って左手も放しました。何しろ木の上に登ったまま、両手とも放してしまったのですから、落ちずにいる訣わけはありません。あっと云う間に権助の体は、権助の着ていた紋附の羽織は、松の梢こずえから離れました。が、離れたと思うと落ちもせずに、不思議にも屋間の中空へ、まるで操り人形のように、ちゃんと立止ったではありませんか？

「どうも難有ありがとうございます。おかげ様で私も一人前の仙人になれました。」

権助は叮嚀ていねいに御時宜おじぎをすると、静かに青空を踏みながら、だんだん高い雲の中へ昇って行ってしまいました。

医者夫婦はどうしたか、それは誰も知っていません。ただその医者の庭の松は、ずっと後あとまでも残っていました。何でも淀屋辰五郎よどやたつごろうは、この松の雪景色を眺めるために、四抱えにも余る大木よかかをわざわざ庭へ引かせたそうです。

(大正十一年三月)



仙人

平成二十三年九月四日 初版

著者 芥川 龍之介

発行所 藍岩堂